

日本大塚大 杉山泰子

目的 アイヌ民族服の形態は筒袖のキジリ袖、衽は無く和服の男切着に似ている。アイヌ文様は日本の文様に似ている部分もあるが、彼等独自の文様を有する。中国の影響に依るものと考えられたので、その影響について調査した。

方法 江戸時代を中心とした残存資料と、日本で開催された中国陶俑展、中国敦煌展その他の展覧会の資料に依る。

結果 中国五千年の歴史の中で、彼等の衣生活を知る一つの手ばかりとして陶俑がある。その材質から残存率が高く、顔の表情、着衣状態等種々のものを判読することおできた。特にアイヌ民族服に影響を及ぼした漢俑は、その衣服に縁布がつけられ、その様子は赤や黒の絵具に依って表現されている。唐代を代表する唐三彩俑からは、奈良薬師寺の「樹下美人図」や、同じ構図の正倉院御物の美人図に代表される、豊頬豊満の俑が色あざやかに作られたものも多く、その衣服形態は、アイヌ民族服のモウルの形態と同じで、胸にギャザーの無いものである。

アイヌ民族文様に及ぼす中国文様の影響は、中国東北部満州の官服である「山丹錦繡」に表現されている種々の文様を始め、「敦煌莫高窟」からは、盛唐時代の碑から唐草文、宝草華文を見ることおできる。また殷周時代の製銅の祭器には饗饗文が描かれており、その影響を受けたアイヌ衣も織表地には数多く作られてカラフルな衣服を構成している。その他雲形文、獅噬文等中国文様がアイヌ衣の文様に大きな影響を与え、日本の文様とは異なる文化を構成したことが理解できた。